

ティンタの男子祭礼用衣装

A0201

ティンタ／ペルー

アンデスの玉手箱－ペルー南高地の祭り与生活

参照資料

図録『アンデス文明』
p.171

着付方法：

帯は結び目が後ろになるように結びます。ベストは上衣の中に着ます。



VESTIMENTA DE FIESTA PARA HOMBRE



㊦：スペイン語 ㊧：ケチュア語

a 上衣〈㊦サコ saco〉 b ベスト〈㊦チャレコ chaleco〉 c パンツ〈㊦パンタロン pantalon〉

d 帯〈㊧チュンピ chumpi〉 e 帽子〈㊧チュヨ chullo〉

上衣や肩掛けいっばいに特徴ある刺繍をしているので、帽子あるいは服装だけでも、一目でティンタの村人であることがわかる。

關先生からのひとこと

祭りはふだんの生活とは違う時間と場を経験することです。だから、ふだん着よりも、もっと派手になるのです。ズボンやベストは、もともとアンデス地帯にはありませんでした。16世紀にスペインによって征服された後、ヨーロッパから伝わった服が、だんだんと受け入れられてきたのです。

ティンタの女子祭礼用衣装

アンデスの玉手箱ーペルー南高地の祭り和生活

A0202

ティンタ／ペルー



参照資料

図録『アンデス文明』
p.171

着付方法：

帯は結び目が後ろになるように結びます。

取扱注意：

帽子のひもは切れやすいです。
特にていねいに扱ってください。

VESTIMENTA DE FIESTA PARA MUJER



⊗：スペイン語 ⊕：ケチュア語

a 帽子〈⊗ モンテラ montera〉 b 上衣〈⊗ サコ saco〉 c 肩掛け〈⊕ リヒリャ llijlla〉 d 帯〈⊕ チュンピ chumpi〉
e スカート〈⊗ ポジェラ pollera〉 f 毛糸の飾り〈チャーリーナ :chalina〉

上衣や肩掛けいっばいに特徴ある刺繍をしているので、帽子あるいは服装だけでも、一目でティンタの村人であることがわかる。野天での祭りなどでは、踊るたびに太陽の光を浴びたスカートがいっばいに広がるため、刺繍が一層に際立つ。

關先生からのひとこと

刺繍のもようは、村によって違います。上衣の中には、寒い高地だとセーターを着ることが多いようすし、ブラウスを着るところもあります。足元は古タイヤを再生したホータ〈jota〉と呼ばれるサンダルや合皮の黒靴などをはきます。

男子日常着のポンチョ

アンデスの玉手箱ーペルー南高地の祭りと生活

A0203

クスコ／ペルー

参照資料

図録『アンデス文明』
p.176

ビデオ「1354 アンデス
高地の一日」

フィールドアルバム
「普段の生活場面 男性
の衣装、帽子」



PONCHO



男性の場合は柔らかい綿のシャツに黒か灰色っぽいズボンをはき、時にはチョッキなども着用している。履物はゴムぞうりが多く、毛糸で編んだ袋を肩にかけることもある。また、寒い時にはポンチョを着たり手袋をはめたりする。

関先生からのひとこと

夜寒くなったときや、風や雨が強いときに特に着ます。手足をすべてポンチョの中に入れて座ります。毛布にくるまっているみたいであたたかいんですよ。



男子日常着の帽子〈チュヨ(ケチュア語)／ゴロ(スペイン語)〉 A0204

アンデスの玉手箱ーペルー南高地の祭りと生活

クスコ／ペルー

参照資料

図録『アンデス文明』
p.171

ビデオ「1354 アンデス
高地の一日」

フィールドアルバム
「普段の生活場面 男性
の衣装、帽子」

「季刊民族学」ファイル
～アンデスの帽子



CHULLO/GORRO



帽子は一般的には山高帽子が多いが、毛糸で編んだ帽子やチュヨ（Chullo）とよばれる耳当てのついた帽子も使われる。このチュヨは高地に住む人々の必需品である。写真は女性がかぶっているが、赤ん坊をのぞいて女性がかぶらない。

關先生からのひとこと

この帽子は、耳当てがついてるから、寒い高地ではとても役立ちます。でも、上の方へ折り曲げて先端のひも同志を結ぶのが、「かっこいい」かぶり方ようです。もようは、とても細かな幾何学模様です。アンデスの男の人は、ずいぶんおしゃれですね。織物は、ほとんど女性の手で製作されます。

女子日常着<リヒリヤ(ケチュア語)/マンタ(スペイン語)> A0205

アンデスの玉手箱ーペルー南高地の祭り和生活

クスコ/ペルー

参照資料

図録『アンデス文明』
p.176

ビデオ「1354 アンデス
高地の一日」

着付方法：
三角に折り、専用留
めピン(A0207 トウ
プ)で留める。



LLIJLLA/MANTA



一般にマンタとよばれるこの織物は、本来女性が雨や寒さを防ぐためのもの。しかし、赤ん坊を背負ったり、収穫物を入れたり、さらには食べ物の食卓がわりに使ったり、様々な用途をもつ重宝な布である。

關先生からのひとこと

マンタは、まさに万能の布です。子どもを背負ったり、買ったものを包んだり、これ一枚で何でも OK !



国立民族学博物館

女子日常着のスカート〈ポジェラ^(スペイン語)〉 A0206

アンデスの玉手箱ーペルー南高地の祭り和生活

クスコ／ペルー

参照資料

図録『アンデス文明』
p.171

ビデオ「1354 アンデス
高地の一日」

フィールドアルバム
「普段の生活場面 女性
衣装と帽子」



POLLERA



女性はおもにブラウスを着てポジェラ（Pollera）とよばれているスカートを何枚も重ねてはく。スカートのすそが汚れたり、ほころびたりするとそのすそのまわりを切り取り、新しいスカートをその上に重ねてはいていくという。

關先生からのひとこと

このスカートは、とても便利です。ふんわりと大きめに作ってあるから、踊る時は左右に美しく揺れ動きますし、しゃがんでトイレの用足しもできてしまいます。

マンタ用留めピン〈トゥプ〉(ケチュア語) A0207

アンデスの玉手箱ーペルー南高地の祭り和生活

クスコ／ペルー

参照資料

図録『アンデス文明』
p.81

取扱注意：

先がとがっています。
特に気をつけて
お取り扱いください。



TUPU

インカ時代の女性の上衣は肩かけを胸の所で重ね合わせ、それを留めピンで留めるようになっていた。この伝統は現在も受け継がれている。

關先生からのひとこと

マンタ（マントのこと。A0205 などのようなもの）を留めるピンです。留めピンは、古い遺跡からも骨製や銅製のものが出てくるので、二千年以上に渡って使われてきたことがわかります。猫科動物は、ジャガーやピューマをはじめとして、古代から神さまのような扱いを受けてきました。そうした動物をかたどった工芸品は数多く見られます。

女子日常着の帽子〈ソンブレロ(スペイン語)〉 A0208

アンデスの玉手箱ーペルー南高地の祭りと生活

クスコ／ペルー

参照資料

図録『アンデス文明』
p.182

ビデオ「1354 アンデス
高地の一日」

フィールドアルバム
「普段の生活場面 女性
衣装と帽子」

「季刊民族学」ファイル
～アンデスの帽子



SOMBRERO



アンデスでは帽子が地方によって違っているため、帽子をみただけで出身地がわかるほどである。女性は髪は三つ編みにして下げ帽子をかぶる。

關先生からのひとこと

帽子は村によって色や形、刺繍やリボンなどが違い、帽子を見ただけで出身地がわかります。だからアンデスの人々は帽子をととても大切にしていますよ。でも元々は、あまり帽子をかぶっていなかったようです。16世紀にスペインに征服された後、ヨーロッパから伝わった習慣が定着したようです。

コカ袋 〈チュспа〉

アンデスの玉手箱ーペルー南高地の祭りと生活

A0209

クスコ／ペルー

参照資料

図録『アンデス文明』
p.149、p.150

ビデオ「1351 アンデス
高地の農耕と牧畜」

『国立民族学博物館展示
ガイド』p.17

フィールドノート
「コカを売っている
場面」



CHUSPA

コカの葉を入れる袋。村や地域により装飾が異なり、男性が用います。コカの葉は先スペイン期から儀礼に用いられ、石灰や灰とともに口にすることで、アルカロイドやビタミンが抽出される効果が注目されてきました。今日では、農作業や旅の疲れをいやすための嗜好品としても使われています。

關先生からのひとこと

コカは、コカインという麻薬の原料です。しかし、一枚一枚の葉に含まれる幻覚成分はとても少なく、設備の整った工場で精製しないと麻薬にはなりません。だから口に入れて噛むのは、チューインガムを噛むようなものです。このコカ袋は男性だけが使います。ふつうは肩からかけますが、腰につけることもあります。女性は小さなハンカチ大の織物に包みます。織物の両端には、ひもがついていて、しっかりとくるむことができます。

投石ひも 〈オンダ〉

アンデスの玉手箱ーペルー南高地の祭り和生活

A0210

クスコ／ペルー

参照資料

図録『アンデス文明』
p.99、p.177

フィールドアルバム

「季刊民族学」ファイル
～雄牛とコンドル

取扱注意：

試すときには、まわりの人や物に十分注意しておこなってください。



HONDA

地方色豊かだが、作り方の原理は同じ組みひも。古くから使われてきた。中央にはさんだ石を目標に向けて上手に飛ばすにはコツがある。手を離れた一方のひもが石の飛んでゆく方向を定め、鉄砲の銃身に似た役をする。



飛ばし方：一方の端を小指にかけておく

關先生からのひとこと

今でも山の牧民は、これで家畜の群をコントロールしています。移動のときに群れからはぐれないように石を投げたり（ぶつけません。）します。石を入れずに、ひもをふりまわしたり、地面にたたいたりすることで音を出しておどかすこともします。4000mの高地ですと、アンデス原産のアルパカやリヤマといったラクダ科動物や羊、もう少し低くなると牛もこの投石でコントロールします。

それにときどき、これを使った戦争のような祭りも村同志で行われています。この祭りはインカの時代から続いているようです。

楽器 〈モセーニョ〉

アンデスの玉手箱ーペルー南高地の祭り和生活

A0211

クスコ／ペルー

参照資料

図録『アンデス文明』
p.175

図録『ラテンアメリカ
の音楽と楽器』
p.59、p.80～p.83

「季刊民族学」ファイル
～アンデス楽器の旅

演奏方法：

吹き口は、長い笛に
平行に連結された細
く短い管にある。



MOHOCEÑO

一般にフラウタとよばれる横笛はインカ時代以前の昔から広い地域で使われている。しかし、細く短い管と長く太い管の2本が平行につけられているモセーニョは、ボリビア高地のみで見られる。

關先生からのひとこと

モセーニョは、2本のピンキージョからなっている楽器で、同時に吹きます。素材は、竹に似ていますが、カリッソと呼ばれる「アシ」の仲間です。

楽器 〈タルカ〉

アンデスの玉手箱ーペルー南高地の祭り和生活

A0212

クスコ／ペルー

参照資料

図録『アンデス文明』
p.175

図録『ラテンアメリカ
の音楽と楽器』p.80

「季刊民族学」ファイル
～アンデス楽器の旅



TARKA

一本の木をくりぬき、そこに6つの指穴をあけた笛で、音がだしやすい。長さの異なるタルカがあり、いずれも、太く、力強い音がでる。これらを組み合わせて、ふつう数人から十数人の編成で太鼓を伴奏に演奏する。

關先生からのひとこと

タルカは、ボリビア高地の農村で使われる楽器です。9～10月頃、農作業のシーズンに入る直前に開かれる祭りで演奏されることが多いようです。長さや太さの違うものを、大勢で吹きます。演奏するのは、男性だけです。学校で教えることもありますが、ふつう、村の人々から習います。

楽器 〈ケーナ〉

アンデスの玉手箱ーペルー南高地の祭りと生活

A0213

クスコ／ペルー



QUENA

参照資料

図録『アンデス文明』
p.175

図録『ラテン・アメリカの音楽と楽器』 p.27、
p.48、p.60、p.72～p.74、
p.88、p.119、p.121

フィールドアルバム
「村での楽器の演奏
ケーナ」

季刊民族学
～アンデス楽器の旅

演奏方法：
「ケーナ初歩の初歩
入門・吹き方」参照

日本の尺八に似た感じの縦笛であるが、吹き口はU字、V字などの形の切れ込みがある。長さにもバリエーションがある。材質は竹やあし、木からできた管を利用するのが一般的だが、動物の骨や角、最近では金属製のものや水道管を利用したものなどもある。

關先生からのひとこと

ケーナは、アンデスのフォルクローレで欠かすことができない楽器です。プロの演奏家が吹くことで有名になりましたが、アンデスの村でも、よく吹いているのを見かけます。男の人だけが吹きます。

昔の遺跡から、骨製のものも出土しています。

楽器 〈ピンキージョ〉

アンデスの玉手箱ーペルー南高地の祭りと生活

A0214

クスコ／ペルー

参照資料

図録『アンデス文明』
p.146

図録『ラテンアメリカ
の音楽と楽器』 p.46、
p.47、p.59、p.80、p.81

「季刊民族学」ファイル
～アンデス楽器の旅

演奏方法：

吹き口の構造は、
リコーダーと同じで
ある。



PINQUILLO

吹き口の構造は、リコーダーと同じであるから、音をだすだけなら簡単である。長短様々であるが、楽器の分類上からはリコーダー式の指孔六つの縦笛をすべてピンクーユまたはピンキージョという。

關先生からのひとこと

ピンキージョは、穴が2つしか空いていないものがあります。それは、演奏用ではなく家畜を追いたてるときや、家畜が増えることを祈る儀式のときに使います。

楽器 〈サンポーニャ (ケチュア語)〉 A0215

アンデスの玉手箱ーペルー南高地の祭りと生活

クスコ／ペルー



ZANPOÑA

参照資料

図録『アンデス文明』
p.175

図録『ラテン・アメリカの音楽と楽器』 p.27、
p.77~p.79、p.83、p.119

フィールドアルバム
「村での楽器演奏 サンポーニャ」

「季刊民族学」ファイル
～アンデス楽器の旅

演奏方法：

ビールびんの口を吹くと音が出るのと同じ原理である。

異なる高さの音を出す管を集めて旋律を演奏できるようにしてある。

エクアドル、ペルー、ボリビアなどのアンデス高地で広くみられるパンパイプ。長さの異なる管を音の高さの順に1列ないし2列に束ねてある。ふつう、大きさの異なるいくつかの多列笛を使い、グループで演奏する。

関先生からのひとこと

サンポーニャの演奏は、普通2人以上の吹き手が組となります。ときには20人もの人が、大きさのちがうサンポーニャを持って吹くときもあります。迫力があますね。

楽器 〈グイロ (ケチュア語)〉

アンデスの玉手箱ーペルー南高地の祭りと生活

A0216

クスコ／ペルー

参照資料

図録『ラテン・アメリカの音楽と楽器』
p.22、p.27、p.62、p.70、
p.100、p.101
「季刊民族学」ファイル
～アンデス楽器の旅

演奏方法：

利き手に棒を持ち、
反対の手で本体を支
えます。

取扱注意：

鳴らすための棒は、
袋のポケットに入っ
ています。
使ったあとは必ず、
もとのポケットに戻
してください。



GÜIRO

ひょうたん・竹・木・骨などに刻み目をいれ、棒でひっかいて鳴らす楽器。グイロまたはギローといえは御存じの方も多いかもしれない。おろし金や洗濯板から、ときには家のとびらまで使ってしまう。何でも楽器にしてしまうラテン・アメリカの人々の本領が発揮されている。

關先生からのひとこと

グイロは、もともとアフリカより移り住んだ人々が生みだしたリズム楽器です。貧しかった移民たちは、身近な生活用具などを楽器にしていました。

楽器 雨音棒〈パロ・デ・ジュビア^(スペイン語)〉 A0217

アンデスの玉手箱ーペルー南高地の祭りと生活

クスコ／ペルー

参照資料

図録『ラテンアメリカ
の音楽と楽器』p.89

演奏方法：
傾けると、音を出す。



PALO DE LLUVIA

振って鳴らす楽器のなかま。ひょうたん、籐製のかご、あるいは金属など容器上のものの中に石や植物の種などを入れたもの。考古品には土器製のものもある。また、棒にコイン状の薄い金属片を通したものなどがある。

關先生からのひとこと

雨音棒は、もともとアマゾン地域で使われていた楽器ですが、最近ラテンアメリカ各地の音楽で、さかんに使われるようになりました。中はサボテンのトゲの根のような突起が、いくつもとび出しています。傾けると、中に入っている植物の種や小石が反対側に落ち、途中の突起にぶつかって、音を出します。

楽器 〈チャフチャ(ケチュア語)〉

A0218

クスコ／ペルー

アンデスの玉手箱ーペルー南高地の祭り和生活

参照資料

図録『ラテン・アメリカの音楽と楽器』p.92

「季刊民族学」ファイル
～アンデス楽器の旅

演奏方法：
柄をもって振る。



CHAJCHA

ひもの先にたくさんの木の実や貝殻、動物のひづめなどを結び付けた楽器。振るとそれらが互いにぶつかりあい音がでる。儀礼や芸能において、身体や衣服にとりつけて使うことが多い。身体を動かすたびにジャラジャラという音がでる。

關先生からのひとこと

アンデス高地の祭りでは、華やかな衣裳を身にまとった人々の中に、ときおり白い衣服に包まれ、足首にチャフチャをつけた集団を見ることがあります。一般にチュンチョといわれ、祭りの中でアマゾン出身者を演じているのです。

楽器 〈マトラカ〉

アンデスの玉手箱ーペルー南高地の祭り和生活

A0219

クスコ／ペルー

参照資料

図録『ラテンアメリカ
の音楽と楽器』
p.101、p.102

フィールドアルバム
「マトラカ演奏」

「季刊民族学」ファイル
～アンデス楽器の旅

演奏方法：柄をもっ
てぐるぐるまわす。



MATRACA

ペルーやボリビアのはじく楽器の一つ。柄をもってぐるぐるまわすと。ガラガラと非常に大きな音をだす。カーニバルには欠かせない楽器。柄の先には歯車がしこんであり、これが木片や金属片をはじいて音をだしている。

關先生からのひとこと

マトラカは、キリスト教の重要な祭りであるカーニバルでよく使われます。最近ではビデオカメラやコンピューターをかたどったものもつくられています。スペインから伝わってきた楽器で、もともとは教会で人を集めるときに使っていたようで、大きさもずっと大きかったようです。

ミュージック CD 〈ワイノ〉 A0220

ペルー

アンデスの玉手箱ーペルー南高地の祭り和生活

参照資料

取扱注意：
許可なくコピーしないでください。



HUAYNO

關先生からのひとこと

サルワの板絵

アンデスの玉手箱―ペルー南高地の祭り与生活

A0221

ペルー

参照資料

図録『アンデス文明』

p.181



PINTURA POPULER DE SARHUA

ペルー南部高地アヤクチュ地方のサルワの村人が描く絵は、民衆芸術の一つとして最近とくに人気が高まっている。農村の日常生活や祭りを題材にした絵の脇には、短い説明文が付け加えられているのが一般的である。

關先生からのひとこと

a の板絵は、牛の角を継ぎ足してリング状にした角笛（ワラプク）吹く男性を描いています。

b の板絵は、夫婦でしょうか、上段では仲良く寝ていますね。下段では男性がトウモロコシのお酒チチャをヒョウタン容器から注いで飲み、女性は、左手に持った原毛を右手で燃って棒に巻き付けています。

c の板絵は、男性が紡いだ糸で女性が機織りをしている場面を表しています。腰機といって、一方の端を木などに固定し、反対側を自分の腰に結びつけ、ぴんと張った状態にして織り込みます。

d の板絵は、病気を治療している場面です。克蘭デーロとよばれる呪術師の医者が、クイという食用モルモットを病人の身体につけて悪い場所を探させます。その後、上段にあるようにクイを燃やして病気の原因となったものを追い払います。

冷凍乾燥じゃがいも

〈チューニョ（スペイン語）／モラヤ（ケチュア語で「白い」という意味）／トゥンタ（アイмара語で「白い」という意味）〉

A0222

クスコ近郊／ペルー

アンデスの玉手箱ーペルー南高地の祭り和生活



CHUNO/MORAYA/TUNTA

参照資料

図録『アンデス文明』
p.151～p.164
『ジャガイモのきた道ー文明・飢饉・戦争』
『新大陸が生んだ食物ー トウモロコシ・ジャガイモ・トウガラシ』
『インカの食卓 古代から続く大地の恵み』
『インカの末裔たち』
p.93～95、122～129、135～139
ビデオ「1351 アンデス高地の農耕と牧畜」

フィールドアルバム
「チューニョ入りのスープ」

「季刊民族学」ファイル
～アンデス高地

「季刊民族学」ファイル
～民族学 タテヨコ・保存食

取扱注意：
防腐処理していません。
決して口に入れない
ください。

アンデス原産のジャガイモには数千にのぼる品種があるといわれている。そのうちのいくつかは、標高 4000m を超える寒冷な高地でも栽培可能である。寒冷地でとれたジャガイモは独特の凍結乾燥法を使って、乾燥ジャガイモに加工する。フリーズドライ製法の元祖だ。

關先生からのひとこと

アンデスのジャガイモは、なんといっても、生を調理したものがおいしいですが、海拔 4000 メートル近い高地でとれる苦みの強いジャガイモは、昼夜の温度差を利用して、野外で冷凍乾燥させます。インスタントコーヒーと同じような原理ですね。カチカチに乾燥させたチューニョは、そのままスープなどに入れてもどして使ったり、石臼ですりつぶしてアルパカや羊の肉と一緒にスープ状に煮込んで食べます。おもゆのような味で、私はあまりおいしいとは思いませんが。

アンデスの玉手箱ーペルー南高地の祭りと生活

参照資料

図録『アンデス文明』
p.151～p.164
『国立民族学博物館展示
ガイド』アメリカ p.2
『新大陸が生んだ食物ー
トウモロコシ・ジャガイモ・トウガラシ』
『インカの食卓 古代から
続く大地の恵み』

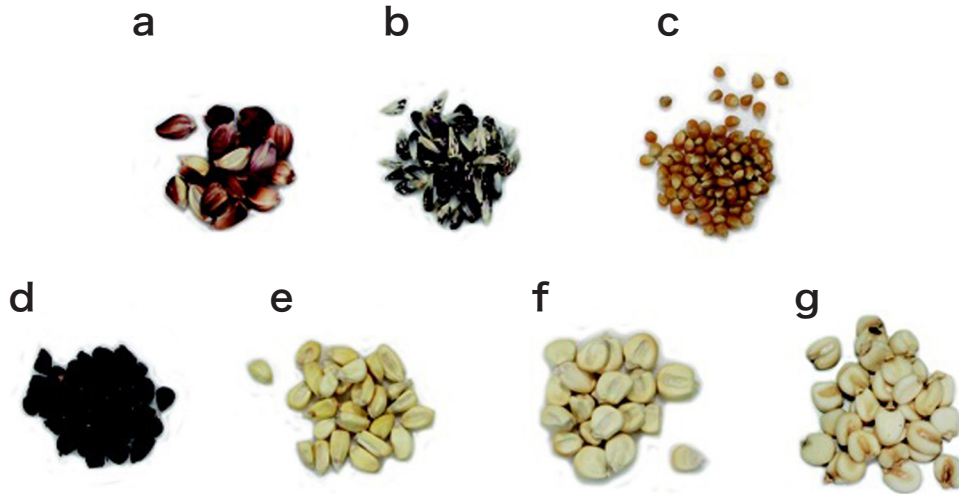
ビデオ「1351 アンデス
高地の農耕と牧畜」～
アイマラ族の農耕、牧
畜の紹介

フィールドアルバム
「トウモロコシの利用
モテ、カンチャ、チチャ
など」

「季刊民族学」ファイル
～アンデス高地、
～アンデスの濁酒、
～民族学タテヨコ・酒

取扱注意：

防腐処理していま
す。
決して口に入れない
でください。



MAIZ

アンデス原産で、インカ以前の時代からアンデスの人々が栽培を行っており、多くの品種がある。新大陸発見後ヨーロッパをはじめ世界中にひろまり、アジアやアフリカなどの熱帯地方で広く栽培されるようになり、主食として利用されるようになった地域も少なくない。アンデスでは食料としてだけでなく、チチャとよばれる酒の材料としても重要な作物である。

關先生からのひとこと

いろいろな色や形がありますが、植物の種類としては1種類です。生をゆでて食べるのをチョコクロといいます。またトウモロコシはよく軒下等にぶら下げて乾燥させ保存します。たとえば**b**、**d**、**f**は食用油を少し垂らした焙烙かフライパンで煎って、つまみとして食べます。これを一般にカンチャと呼びます。**c**はポップコーンですね。**d**は煮出して砂糖を加えるとチチャモラーダという紫色の清涼飲料水になります。夏の暑いとき水代わりに飲みます。**g**はジャイアントコーンとして日本でも揚げたものが売られていますが、ペルーではスープに入れたり、茹でてそのまま食べます。ゆで戻したものは一般にモテと呼ばれます。またすり潰してからトウモロコシの葉でくるんで蒸す料理法もあります。このほかにも、モヤシのようにひげ根を出したトウモロコシをつぶし、煮て酒を造ります。